2003年度　人文学研究所活動報告

共同研究グループ

文化のかたち

1.「文化のかたち」研究会

2. 研究会の開催

(1) 第1回

開催日　2003年6月18日（水）

会場　神奈川大学17号館3階談和室

テーマ　「今年度の活動方針について」

出席者　秋山，堤，大須賀，米重，佐藤，岩本，羽佐田，水野

(2) 第2回

開催日　2004年2月20日（金）午後1時～

会場　神奈川大学17号館2階人文研究所資料室

出席者　秋山，小馬，中本，水野，堤，大須賀，佐藤

3. 活動内容

来年度の叢書刊行を目指して，その原稿を準備するステップとして，11月までに各自の専門性を生かす方向で執筆計画書を各自提出することとし，各自が提出した原稿を検討して，座談会を開いてディスカッションし，作品をより良いものにしていく共同研究の場としてゆくことで一致した。

（水野光晴）

自然観研究グループ

1. グループ名　自然観研究グループ

2. 講演会の開催

開催日　2003年9月24日（水）

会場　神奈川大学17号館216室

発表者　永見文雄教授（中央大学文学部）

演題　「自然について―ジャン＝ジャック・ルソーを中心に―」

3. 活動内容

研究テーマを「自然観の変遷と展望」ときめて，次のような三分野において順次，講演会を行っている。1) 思想における自然観　2) 文学における自然観　3) 環境学における自然観

早いもので，2000年度から始めたのが，次年度で5年めとなり，2005年刊行予定の叢書のための執筆が日程に上って来た。

（佐藤夏生）

ポストコロニアル・スタディーズの冒険

本研究グループは，2000～01年度神奈川大学共同研究奨励金「ポスト植民地主義思潮の研究」の成果として，神奈川大学評論叢書第10巻『ポストコロニアルと非西欧世界』御茶の水書房（2002年）を刊行した。今後の研究活動（第Ⅱ期）の開始時期とその展開については，現在模索中である。

（永野善子）

スポーツの系譜

1. 講演会・研究会の開催

(1) 第1回講演会

2003年6月9日（月），17-215室，平井信行（気象予報士），「野球と気象」

(2) 第1回研究会

2003年11月14日（金），体育共同研究室

2. 活動内容

グループ設立2年目の今年，八久保厚志氏のご尽力で初めての講演会を開いた。テレビで有名な気象予報士の平井氏はかつての高校球児であり，特にプロ野球のチームの試合と当日の気象との関係などを中心に講演していただいた。会場には将来の気象予報士の夢を持つ学生も集まりさまざまな議論に花が咲いた。

初めての研究会は周知不徹底で参加者が少なかったが，文化とスポーツあるいはソフトウェアとしてのスポーツという視点をとりつつ，3，4年後をめどにまとめていくという計画で一致した。

（三星宗雄）

現代精神史におけるスペイン内戦の意義

昨年度に引き続き，今後の展望について，構成員で数回狭義した結果，当共同研究の意義は確認されつつも，本グループは発展的に解散することとした。グループ発足者の逝去，重要メンバーの定年退職などを受け，共同研究を支えるに足る十分な数の構成員の獲得が不可能なためである。

（大林文彦）

色彩語の社会言語学的研究

代表者　彭国躍

メンバー　三星宗雄，彭国躍，堤正典，星野澄子，尹亭仁，新木秀和，加藤宏紀，小馬徹

活動内容

11月5日に一回目の会合を開いた。研究発表「色彩学の中の色名」（三星）を行った後，今後の活動計画について議論を交わした。次回の会合は，日本，中国，ロシア，韓国，スペインなどの言語社会における色彩語研究の現状と問題点などについて話し合う予定である。

日中関係史

今年度は，メンバーが集まって打合せ会あるいは研究会を開く機会を持てないまま，講演会を数回開くに留まったのは遺憾である。来年度はその点を反省して，大小さまざまな研究会活動を基本に据えたい。

今年度開いた講演会（開けなかった分を含む）は以下の通りである。

03年5月8日　横堀克己氏（元朝日新聞論説委員）「北京からの報告」―SARSの影響で中止。

6月5日　曹振威氏（中国復旦大学教授）「上海から見た戦後日中関係史」。
7月3日　横浜の国際交流を考える
1) 浦川久代氏（横浜市国際交流協会職員）「横浜市の国際交流活動について」
2) 早川秀樹氏（多文化まちづくり工房代表）「地域と密着する国際交流活動」
10月20日　片寄浩紀氏（国際貿易促進協会専務理事）「今後の日中経済関係」

なお，本学の共同研究奨励金を得た「戦前中国における日本租界の研究」の成果は，『人文研究』No.149に掲載することができた。また，メンバー3人と曹振威氏による座談会記録「歴史問題と日中関係の現在」は，『神奈川大学評論』46に発表した。

（大里浩秋）

西洋文化の受容―思想と言語

テーマ　近代日本における西洋文化受容の総合研究
代表者　高野繁男
活動内容

前2年間，本学共同研究奨励金を受けたが，2003年度は，その総括として本研究所叢書にまとめるための，個々の論文の読み合わせを中心に月例会をもった。その成果として，叢書20号「『明六雑誌』とその周辺―思想と言語―」を出版する運びとなった。叢書の執筆者，例会における外部講師による講演会は以下のようである。

執筆者　浅山，伊坂，岡島，鈴木，高野，吉井の6名
講演会　6月25日
目白学園短期大学教授　陳　力衛氏「和製漢語の展開」

（高野繁男）

物語研究

本年度の活動は，構成員各自の研究には進展があったものの，責任者の日高がサバティカル中であったこともあり，グループとしての活動は，残念ながら低調だった。

本グループの研究は，神話，伝承，前近代の物語，近代小説まで，口承書承を問わず，物語性をもつ言語表現の形態全般を対象として，ストーリーやプロットなどの（構造的）論理を考究すると共に，時間的・偶然的な要因である歴史性についても幅広い視点から考察を深めることを目的としている。

ただ，グループの発足以来の悩みは，構成メンバー6名（常勤教員5名，非常勤教員1名）と少ないうえ役職者も多く，研究活動の日程調整がきわめて難しいことであった。

そうした研究条件の中で活動を継続する方策として，構成員各自がある程度纏まった文章を他の全メンバーに随時送付して相互批判を乞うという融通性のあるシステムを採用し，これを「物語研究会通信」と名付けてきた。他のメンバーが来信に自由に応答しながら，次の発信を用意するのである。これを活用しつつ，次年度はメンバーを増やして活動を活性化したい。

（日高昭二）

各国地方史の比較史的研究―新編中国地方志（誌）叢書を中心として』

第一回　研究会での報告者及び内容について
日　時：2003年7月25日　場所：17号館　人文学研究所資料室
出席者：10名

報告者：小林一美

1. 共同研究グループ発足にあたっての趣旨説明。

研究テーマ：「世界史を現存する国家，民族，文明というレベルで考察するのではなく，地方史という狭い地域的観念から見直すことを目的とする」。

活動計画：本学人文学研究所で購入した大量な中華人民共和国地方史叢書を分析し，世界各地域の研究者とともに現存の国家，民族，文明に収斂しない地域・地方文化の多様性を再発見することを目的とする

定期的に研究会を開き，中国研究者と他分野研究者の二名の発表を行うこととする。

2. 「『中華人民共和国地方志（誌）叢書』を主たる資料，史料として書いた私の4つの論考について」

①「中華世界の構造と難民，移民，華僑」

②「中国社会主義政権の出発—鎮圧反革命運動の地平—」

③「1930年代初期，中国共産党の内部粛清の実態」

④「中華帝国を夢想する叛逆者たち」

報告者：佐々木恵子

「中国地方志叢書について」

地方志とはなにか，地方志の定義。

史料としての地方志，その利点と問題点。

新編中国地方志叢書の利用価値について。

以上の報告に対する質疑応答。

第二回　研究会での報告者及び内容について

日　時：2003年12月5日　場所：17号館　人文学研究所資料室

出席者：6名

報告者：小林一美

「上海の復旦大学を訪れて」

復旦大学に日本語の蔵書約5000冊（雑誌を含む）を寄贈したため，贈呈式に出席した際の様子と中国の大学における日本語書籍の現状と日本研究の問題点についての考察。

報告者：孫　安石

「最近の上海市関連の地方誌出版について」

1930年代から現在に至るまでの上海における地方誌出版の歴史的流れとその内容についての報告。

1. 上海地方誌の出版と中華民国。
2. 1930年代の上海研究。「上海市通志館」の重要性について。
3. 1980年代以降の地方史研究。「中国地方誌研究会準備会」会議の開催等について。
4. 上海の各種区誌と専門別通誌の発行について。『虹口区志』と『黄浦区続志』にみられる租界及び日本人に関する記述の重要性について。コミュニティー活動，環境衛生に於ける中国の現状と日本との比較。『上海審判志』にみられる裁判事例の提示。

以上の報告に対する質疑応答。

（代表　小林一美，報告書作成　佐々木恵子）

東アジア比較文化研究会

人文学研究所の共同研究グループ「東アジア比較文化研究会」は日本，中国，朝鮮等の言語，文学，歴史，民俗などを比較文化的視点から研究することを目標に，これまで東アジア（日本・中国・朝鮮）の文化を比較し，相互の影響関係やそれぞれの独自性を検討する作業を行ってきた（1995年，1996年には科研「中国江南の都市文化研究」という研究実績がある）。

昨年からは学内共同研究奨励金「環東シナ海伝承文化の総合的研究プロジェクト——海洋ネットワークの視点からの接近」（共同研究奨励金グループ活動報告を参照）に採択され，活動を展開しているが，多くのメンバーが神奈川大学の「21世紀COEプログラム——学際・複合・新領域（人類文化研究のための非文字資料の体系化）」に参加することで，本共同研究の活動は残念ながら低調であった。しかし，21世紀COEプロジェクトに本共同研究の多くのメンバーが参加していることは，東アジア比較文化研究というテーマがもつ意味が再度確認されてことを意味する。神奈川大学のCOEについてはhttp://www.himoji.jp/img/t_headSetsumei.jpgを参照。

（孫安石）